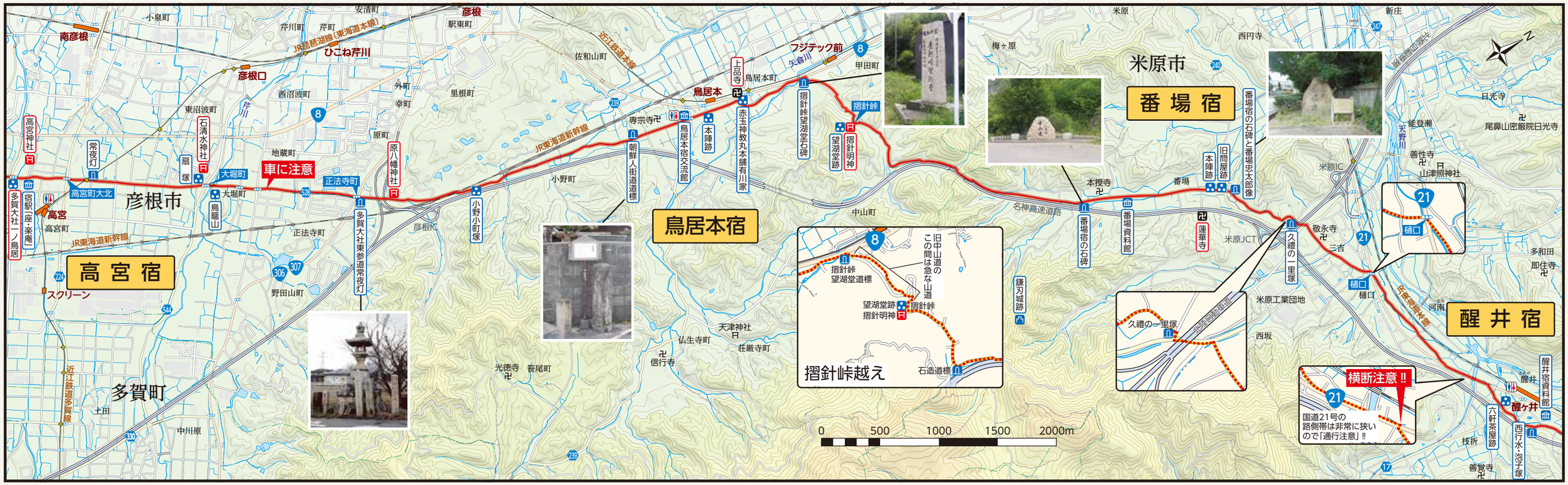
# 高宮から道中合羽の鳥居本宿、摺針峠を越え番場、梅花藻の醒井宿へ

高宮から
醒井宿
約14km

多賀大社の門前町、高宮を出て、小野小町ゆかりのまちを過ぎ、道中合羽の鳥居本宿へ。赤玉神教丸有川家の前を通り、近江路中山道のハイライト、摺針峠へ。峠を越えると番場の宿。北条仲時の悲劇の場・蓮華寺をすぎ、梅花藻と清流のまち・醒井にはいります。




## 鳥居本宿

江戸時代になって、それまであった小野宿に代わって宿となりました。地元に残る史料の中に慶長8年(1603)に徳川家康が派遣した検地奉行の嶋角右衛門の命により鳥居本に移したという伝承が残っています。天保14年(1843)の記録によると、南北10丁余(1,100m)、本陣1、脇本陣2、問屋場1、旅籠23軒、人口は1,448人、総戸数293戸と記載されています。宿の南側は、彦根城下とつながる朝鮮人街道があり、北上して米原方面に向かう北国街道と、2つの街道の分岐点があることが特徴です。

## 赤玉神教丸有川家

有川家住宅は、「赤玉神教丸」を製造・販売する旧中山道鳥居本宿の大店舗として広く知られています。現存する店舗は江戸時代中期に建立されたと考えられ、幕末の皇女和宮の降嫁や明治天皇の北国巡幸などの際の小休憩所として供されました。堂々とした建物外観、機能的な建物構成は、江戸時代の大店舗の姿を良好に留めています。「赤玉神教丸」は、腹痛、食傷、下痢止めの妙薬として有名で、300年以上の歴史を誇っています。創業は元治元年(1658)と伝わり、「お伊勢七度、熊野へ三度、お多賀さんには月詣り」とうたわれた多賀神社の神教によって調製したことが始まりです。多賀の坊宮が全国を巡廻して、多賀参りを勧誘する際、神薬として各地に持ち歩いたといわれています。

## 上品寺(じょうぼんじ)

歌舞伎で演じられる「法界坊和尚」の鐘が残る寺。江戸から大八車に乗せて、この地まで運んだという鐘は、吉原の花魁たちの浄財を受け、悲運の遊女たちを供養するために作られ、遊女たちを含めた寄進者たちの名前が刻まれています。

## 鳥籠山と不知哉川(とこやま いさやがわ)

芹川を越えた東側に見える椀を伏せたように、こんもりと丸い山は、鞍掛山、別名大堀山です。この山は「鳥籠山(とこやま)」の比定地です。鳥籠山は壬申の乱の戦場として「日本書紀」に記載があり、古来歌枕として有名な山です。

「淡海(おうみ)路の
　鳥籠の山なる不知哉川(いさやがわ)
　日のこのごろは恋ひつつもあらむ」
　(万葉集)

大堀山が鳥籠山とすれば、芹川が不知哉川となりますが、確かではありません。

## 石清水神社・扇塚

大堀の集落、芹川の手前にある石清水神社。祭神は応神天皇とその母の神功皇后。神社に上がる石段の途中に「扇塚」と刻まれた塚があります。

彦根藩十一代藩主井伊直中と親しかった喜多流能の宗家九世・喜多古能が建立したもので、「豊かなる時にあふぎのしるしとして　ここにもきたの名を残しておく」と記されています。この扇塚は、彦根を去ることになった古能が愛用の扇を埋めたところです。

## 小野小町塚

滋賀県彦根市小野町に伝わる小野小町塚の祠に「小野小町塚御堂」が地元の方々の手で建てられています。

中世の東山道・小野宿とされている同町の南端にあり、「奥州に下る途中の出羽国郡司小野美実(好実)が、小野で出会った生後間もない女児を養女にもらい受けた。この女児が小町という」との伝承が残されています。

## 朝鮮人街道出合

鳥居本のもっとも南に軒を連ねる旧百々村は、室町時代後期から戦国時代にかけて、京極氏の被官であった百々氏が本拠地としたところ。ここから西へのびる彦根道は、佐和山の南を南西に走り、彦根城下と中山道をつなぐ道です。

彦根藩二代藩主井伊直孝の時代に、新道が敷設され、以降、彦根道、切通道、朝鮮人街道などと呼ばれ、彦根城下と中山道をつなぐ重要な道として多くの人々が行き交いました。

## 摺針峠・望湖堂跡(すりはりとうげ ぼうこどう)

摺針峠は、中山道随一の名勝として知られ、ここからの眺望は、「眼前好風景なり。山を巡りて湖水あり。島あり。船あり。遠村あり。竹生島は乾の方に見ゆる。画にもかかまほしき景色なり」(『近江輿地志略』)と記されているように、多くの絵画の題材になっています。

## 番場宿

江戸日本橋から数えて62番目にあたり、古代の東山道や中世の東海道が通り、鎌倉時代にはすでに宿の機能をはたしていたと考えられます。慶長年間(1596～1615年)に米原に湊が築かれ、中山道と結ぶ深坂道が切り開かれ、寛永年間(1642～1644年)にその合流地点に中世からの番場宿を移して新たに設けたのが中山道番場宿です。南北1丁10間(約127m)で、本陣、脇本陣各1、旅籠10軒、人口は809人、総戸数178戸で、弘安年間(1278～1288年)に北陸遊行中の一向上人によって深く帰依した、当時の領主土肥氏によって再興された蓮華寺があります。

## 蓮華寺

聖徳太子により推古天皇の23年(615)、法相宗の憲崇律師によって造営され、もとは時宗で法隆寺と呼ばれていました。昭和17年(1942)、浄土宗に改宗。堂宇は、室町時代に焼失。戦国時代に再興されています。南北朝時代、北条仲時は、足利尊氏の寝返りにあって鎌倉へ落ち延びる途中、この地で、京極道誉に阻まれ進退極まり432人が自刃。流れ出た鮮血で、辺りは血の川と化したと伝えられています。

また、長谷川伸の小説「瞼の母」の舞台として知られ、番場の忠太郎の故郷として、境内に忠太郎地蔵や碑が建てられています。

## 久禮の一里塚

番場宿をぬけ、醒井に向かう道。久禮の領内に入るところに、一里塚がありました。平成7年(1995)、元の位置からは約100m東に行ったところに「中山道一里塚の跡」という大きな石碑が建てられました。

## 鎌刃城跡

番場の標高384mの山頂に位置する戦国時代の山城跡で、国の史跡に指定されています。その築城年代はわかっていませんが、城跡の位置する山なみは江南と江北の国境線であることから、「境目の城」として15世紀、応仁の乱の頃には築城されていたと考えられます。

遺構は、石垣、堀切、曲輪が見事に残されており、その規模は湖北でも最大級を誇ります。特に唯一地続きとなる南方尾根上には七重におよぶ堀切が設けられ、西方尾根上には近江ではめずらしい畝状竪堀群(うねじょうたてほりぐん)が認められました。また、城跡の南側谷筋を流れる青龍滝には「水の手」と呼ばれる石樋も残されており、城内への飲料水を確保するために設けられたと考えられています。

## 番場資料館
(湖北エコミュージアムJサテライト
鎌刃城と中山道の宿 番場)

郷土の偉人である彫刻家、泉亮之(すけゆき)や国史跡の鎌刃城跡を紹介する資料館。亮之の作品や鎌刃城跡に関するパネルなどを展示しています。

建物は明治から大正にかけて活躍した亮之の生家。亮之が得意とした蛇や子犬の彫刻のほか、息子の亮俊の作品なども展示されています。

## 西行水と泡子塚

醒井宿の入り口、目にとまるのが、「西行水と泡子塚」。民家裏手の山裾岩根から湧き出る泉で、岩の上に苔むした石塔があり、「泡子塚」と呼ばれています。